

2018 年度秋学期授業評価アンケート集計結果について

2019 年 6 月 20 日

< 設問別 >

※問いは大きく四つのカテゴリー、< A：履修者の自己評価 > / < B：シラバスについて > / < C：担当者と授業について > / < D：授業の成果について > に分けられ、全部で 8 の問いがある。これに加えて、問 9 として < E：授業外学修時間 > について尋ね、最後に、授業改善に向けた自由記述が出来るようになっている。この結果をもとに、科目担当者はシラバスの振り返り項目にレスポンスを記入することになっている。

なお、質問項目を整理し、問いは全 9 問とした。(昨年度までは 11 問)

設問区分		設問
A	問 1	私は、自主的かつ意欲的に取り組んで、この授業を受けた。
B	問 2	私は、この授業を履修する際、何を学修するかを理解するために、シラバスを読んだ。
	問 3	担当者は、シラバスで授業の目標や計画、授業の評価方法を適切に示していた。
C	問 4	授業の担当者の教え方（説明の仕方や話し方）は適切だった。
	問 5	授業の進度は適切だった。
	問 6	授業の内容はわかりやすかった。
	問 7	授業担当者は、学生が質問や相談をしやすい環境・雰囲気作りを行い、適切な助言を与えたり質問に答えたりしてくれた。
D	問 8	総合的にみて、この授業は私にとって有益だった。
E	問 9	この授業の授業時間外の学修時間（授業 1 回ごとの平均）※該当するものにマーク ① 30 分未満、② 30 分～1 時間、③ 1～2 時間、④ 2～3 時間、⑤ 3～4 時間、⑥ 4 時間以上

※問いに対する回答（1～8）は、以下の選択肢から選ぶように求められた。（問 9 のみ質問票の通り）

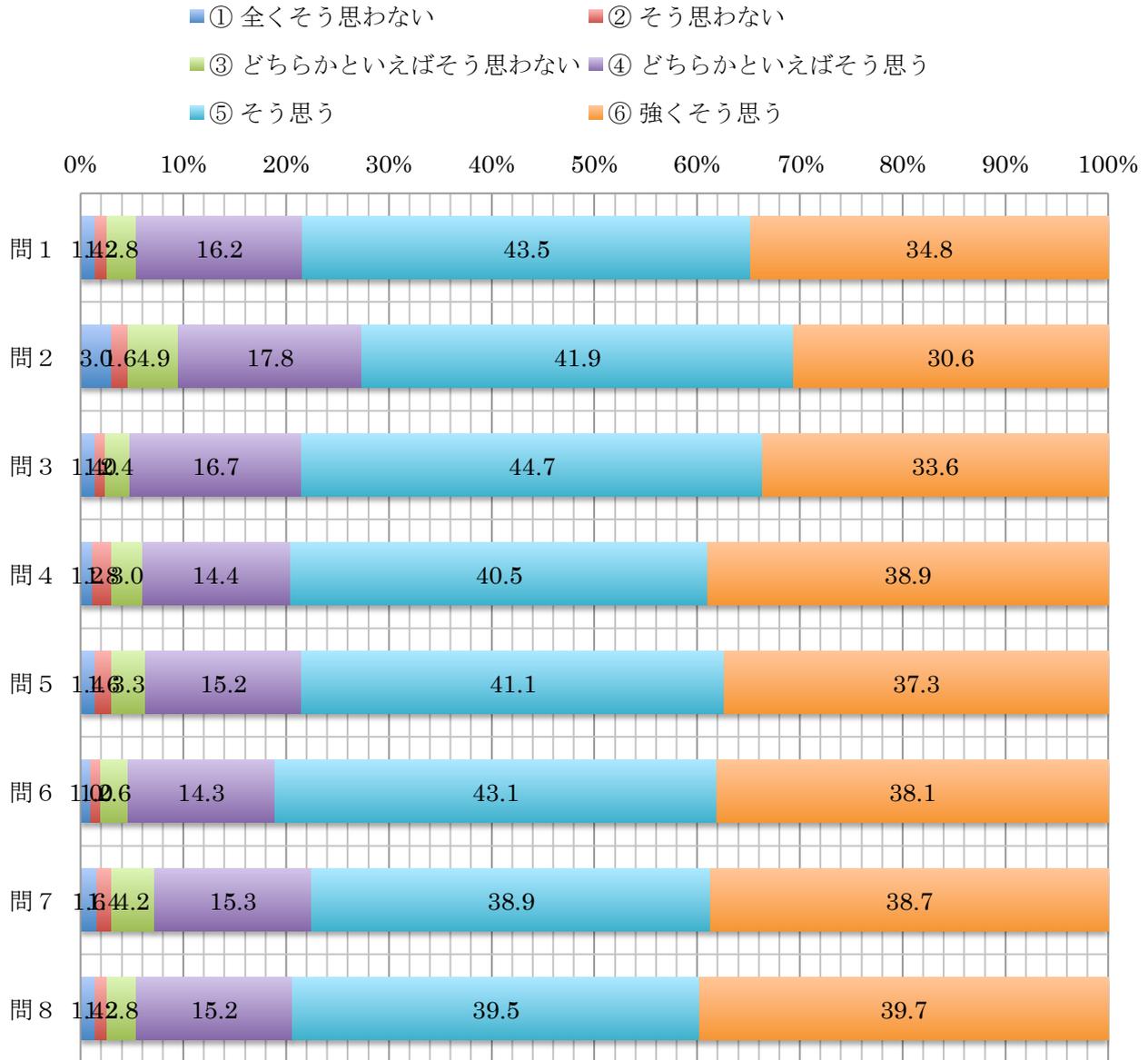
回答内容	マークシートの記入番号
全くそう思わない	①
そう思わない	②
どちらかといえばそう思わない	③
どちらかといえばそう思う	④
そう思う	⑤
強くそう思う	⑥

< 教育課程全体について >

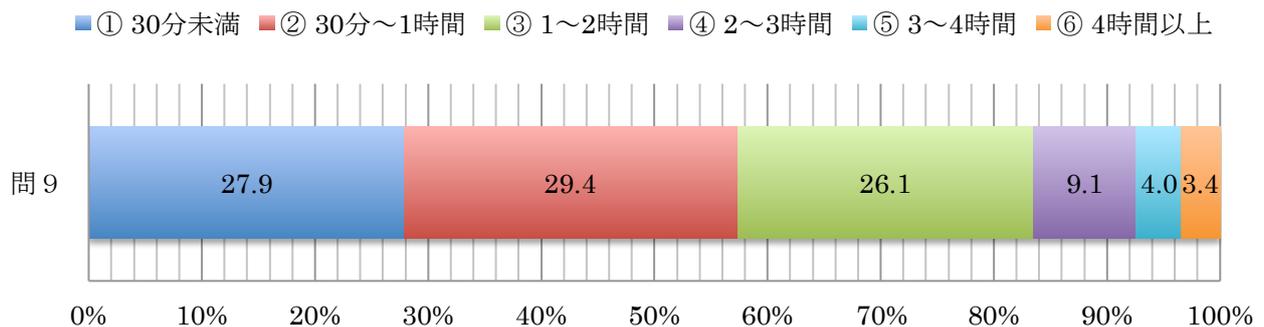
科目登録人数（6381 人）のおよそ 49.4%（3151 人）から有効回答（昨年度同期 50%）を得た。

教育課程全体として、ここ数年来特に変化なく④「どちらかといえばそう思う」から⑥「強くそう思う」の肯定的評価を受けており、春学期に比べると、すべての問において 9 割以上のプラス評価を受けたといえる。

2018年度秋 科目全体



問 9 2018年度秋 科目全体 授業外学修時間



設問区分ごとのコメント

A. 受講者自身の自己評価について

ここでは①～③の消極的回答は春学期より若干下がって5%程度で、授業科目を意欲的に受けたと積極的に自己評価する学生が9割以上となっている結果は喜ぶべき事であろうか。

B. シラバスについて

ここでは(問2)①～③の消極的回答は9.5%で、春学期よりも下がっており、科目選択の際にシラバスに目を通していない学生が漸減しているとはいえ、依然として1割程度はあり、誤差範囲のようにも考えられるので、読むことの重要性を引き続き説きたい。

教員側のシラバスの提示内容(問3)については、95%が肯定的評価となっており、シラバス作成が定着してきたことがあらわれている。

C. 担当者と授業について

問4～問7の項目では、④～⑥の肯定的評価が9割を大きく越えており、教育課程全体として高いプラス評価を受けていると言える結果となった。

D. 授業の成果について

問8の授業が有益でなかったと回答をした(①～③)学生が5%(春学期は8%、昨年度は7%)存在するが、むしろ95%の学生が肯定的に評価した受け止め、春学期同様、教育課程全体の授業成果について積極的に評価しておきたい。

E. 授業外学修時間について

1単位科目(45時間の学修時間必要)では週1回の授業に対し授業外学修時間として1時間必要とされ、2単位科目(90時間の学修時間必要)では週1回の授業に対し授業外学修時間として4時間が必要とされている。本学の教育課程上、1単位設定の語学教育科目が多いとはいえ、昨年及び春学期と同様に、①(30分未満)～③(1～2時間)で回答の8割を越えていることは由々しき状況であるといわざるを得ず、圧倒的に学修時間不足であることを示している。授業外学修で何をすべきかを指示するのみでなく、これを点検・評価する科目設計の実質化が必要である。

< 教養教育科目について >

科目登録人数(1881人)のおよそ52%(969人)から有効回答(昨年度同期50%)を得た。

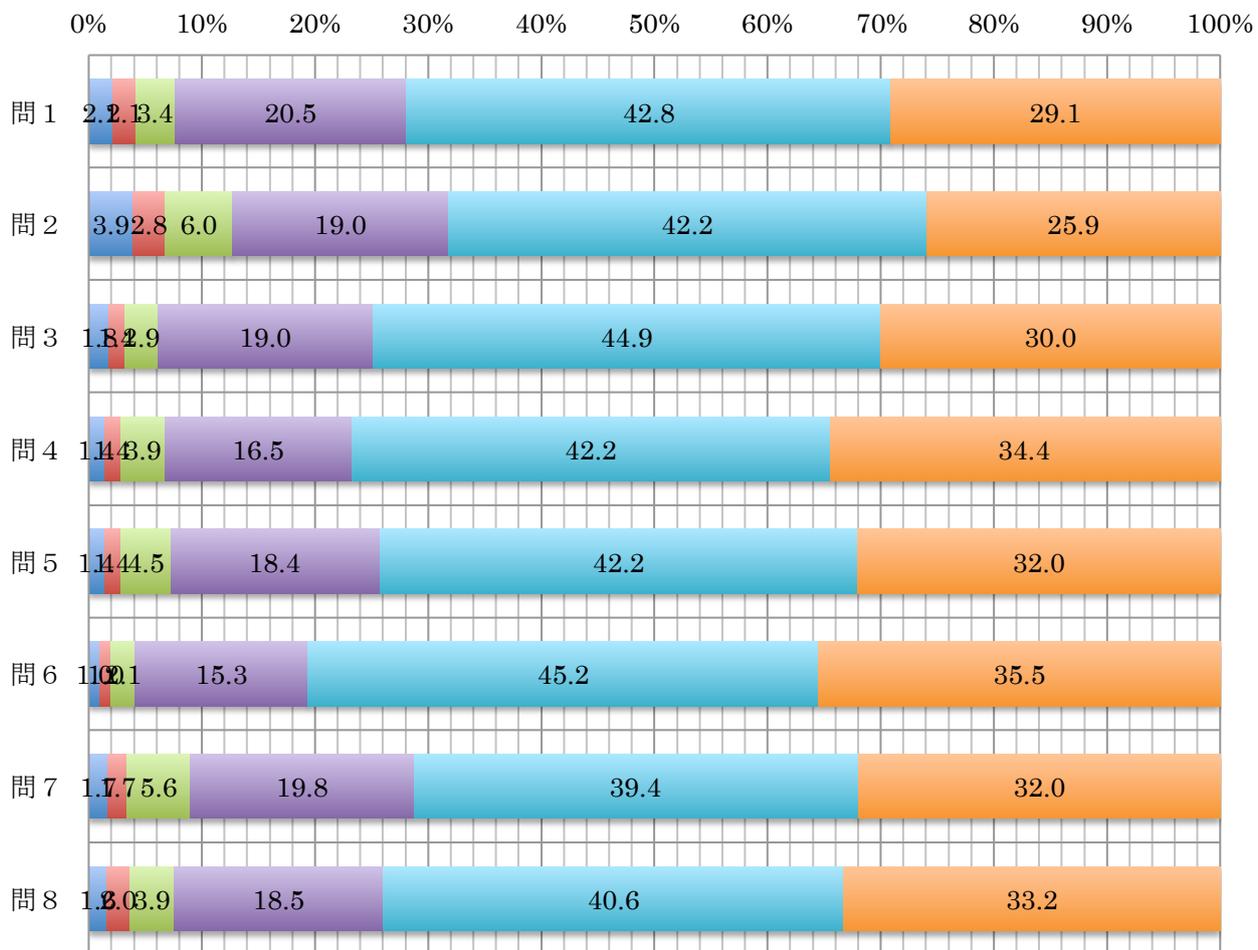
教養教育科目は両学科の学生が履修する教育課程にあたるため、科目数および受講者数ともに多い。

教養教育課程としての全体的な傾向としては、おおむね学部教育課程全体の平均を下回っている結果(科目毎では、全体科目の傾向を上回っている科目もあれば逆もある)となっている。これは過去においてとほぼ同様であり、大きな変動はみられない。ただ、2018年度春学期と比すと、秋学期の結果は、全体として肯定的評価割合は若干高くなっている。

2018年度秋

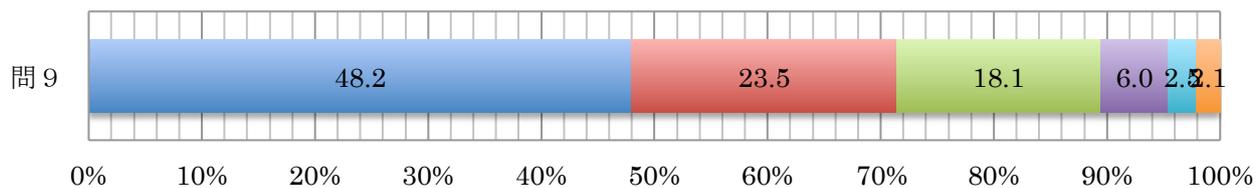
教養教育科目

- ① 全くそう思わない
- ② そう思わない
- ③ どちらかといえばそう思わない
- ④ どちらかといえばそう思う
- ⑤ そう思う
- ⑥ 強くそう思う



問 9 2018年度秋 教養教育科目 授業外学修時間

- ① 30分未満
- ② 30分～1時間
- ③ 1～2時間
- ④ 2～3時間
- ⑤ 3～4時間
- ⑥ 4時間以上



設問区分ごとのコメント

A. 受講者自身の自己評価について

ここでは①～③の回答は 7.6%で（春学期 10%、昨年度は 9%）、程度の差はあれ意欲的に授業を受けたと自己評価する学生が 9 割以上であったとの結果となった。昨年度の秋学期と比べると若干減っており、また春学期よりも下がっているため、このまま限りなくゼロに近づくことを期待したい。

B. シラバスについて

ここでは（問 3）①～③の回答は 13%（春学期 13.3%、昨年度 11%）であり、上下動を繰り返しているが、シラバスを読んでいる学生が若干増えている結果にはなっている。シラバスの存在は周知徹底されているはずであるが、科目選択の際にシラバスに目を通さない学生が 1 割強存在することは常に問題であり、科目選択のミスマッチを起こさないために、読むことの重要性を引き続き説くことが必要である。

教員が提示しているシラバス自体の評価（問 3）は、教育課程全体の評価と変わりなく高い。

C. 担当者と授業について

この項目（問 4～7）では、④～⑥の肯定的評価で 9 割を超えており（2018 年度春よりも何れの項目も高い評価結果）、教養教育課程の各科目に関してはおおむね肯定的な授業評価を受けているとの結果となった。中でも、問 6 の「授業のわかりやすさ」に関して、特に肯定的評価が高い結果であった。

D. 授業の成果について

問 8 の授業が有益ではなかったと回答をした学生が 7.5%（昨年度 8%、2018 年度春 12%）であり、教養教育科目の授業成果をかなり肯定的に受け止めている学生が多いととらえて良いと考えられる。ただし、教養教育科目の教育課程上の意義などを今一度学生に意識づける必要がある。シラバスをしっかりと読んだ上で受講した結果であることを願いたい。

E. 授業外学修時間について

週 1 回の授業に際し 4 時間の授業外学修が必要となる 2 単位科目が多い教養教育科目での今回の結果、4 時間以上と回答した学生は 2%（春学期も 2%で、全体でも 3.4%）であり、4 時間以上学修する学生はある一定程度のみ存在していることがわかる。しかし、問題は、教養教育科目の授業外学修時間が全体に比べ少ない事を示していることであり、学修時間 1 時間未満が 70% を超えてしまっている。圧倒的に学修時間不足であることを示している。

ちなみに、語学教育科目（1 単位：授業外学修に必要とされる時間は週 1 時間）に限ると、30 分以上 2 時間未満と回答した学生が過半数を超えており、求められる学修時間は満たされていると言える。本来講義科目の学修時間でこなされるべき課題が出されていないことが問題なのか、履修学生の主体的取り組みが不足しているのか難しいところだが、毎度記すように、科目設計の実質化がますます求められるなか、少なくとも、課題として、授業外学修で何をすべきかを明確に学生に指示しかつこれを教員が確認する仕組みを作る必要があるように思われる。

（文責：前教育支援部長 山川）